

短期海外実地研修の教育的効果

Effectiveness of a short-term overseas study program

山本 大^a・原 怜来^a・北村 勝朗^bYamamoto Dai^a, Reira Hara^a and Kitamura Katsuro^b

キーワード：オーストラリア，スポーツ，英語

1. はじめに

大学における短期海外実地研修は、学生に異文化体験と国際的な視野を提供する貴重な機会である。特に、グローバル化が進む現代社会において、学生が他国の文化や習慣に直接触れることは、将来のキャリアにおいても貴重な体験とされている¹⁾²⁾。また、異なる文化的背景を持つ人々とコミュニケーションをとる能力は、国際的なビジネス環境や多様化する社会において重要なスキルである³⁾。このような経験は、教室内的での学習に比べ、より深い理解と洞察を与えるとされている⁴⁾⁵⁾。実際に異なる社会制度や経済環境の中で学ぶことは、学生に新しい問題解決のアプローチや異なる視点を身に付けさせることにつながる。特に短期間であっても、海外での生活は学生にとって大きな自己成長を促す機会となる。新しい環境での挑戦を通じて、自己効力感や適応力を高めると同時に、国際的なネットワークを構築するきっかけとなる⁶⁾⁷⁾。したがって、短期海外実地研修は、学生の人格的な成長にも寄与する重要な教育プログラムであると言える。

日本大学スポーツ科学部における短期海外実地研修は、スポーツを通じて異文化理解を深めることを目的としており、参加者が得られる経験や知識によって、国際的視野を広げることが期待される。本研究では、短期海外実地研修に参加した学生を対象にアンケート調査を実地し、研修が彼らのスポーツに対する認識やグローバルな視点の形成にどのように寄与したかを明

らかにすることを目的とした。また、本調査では、異文化環境下での適応力やコミュニケーション能力がどの程度向上したかも併せて検討し、研修が与える教育的効果についても考察する。

2. 研修内容

2.1 研修目的

この研修の目的は主に2つに分けられる。第1の目的は、日本とオーストラリアにおけるスポーツへの取り組みや指導方法を比較し、その相違点を理解することである。各国のスポーツ文化や育成システムに対する知識を深め、国際的な視野からのスポーツ科学の理解を促進することが期待されている。第2の目的は、講義の受講やスポーツ現場での実践的な体験を通じて、英語を積極的に活用し、コミュニケーション能力を向上させることである。実際の日常場面における英語を理解することで、より実践的な英語運用能力を養うことを目指した。

2.2 参加者

参加者は、2024年度前期集中講義「海外実地研修」に参加した男子学生7名および女子学生7名の合計14名であった(表1)。

表1 参加学生の属性

属性	性別		学年		
	男	女	1	2	3
人数	7	7	4	7	3

^a 日本大学スポーツ科学部
College of sports science

^b 日本大学理工学部
Nihon University

2.3 研修日程および内容

本研修は、日本とオーストラリアのスポーツに対する取り組みを比較することを目的に、事前学習を2024年7月19日(金)・26日(金)の2日間で実施した後、実地研修を9月10日(火)～9月17日(火)の全8日間で実施し、帰国後、9月27日(金)に事後学習を行った。実地研修では、ニューカッスル大学のスポーツ施設見学、ピラティスや男女混合タッチラグビーの実技実践、トレーニング施設見学および試合後のリハビリに関する講義、パークランの参加、女子ラグビーの観戦と現地の人々との交流を行った(表2)。

3. 調査方法

対象者は、研修に参加した学生14名とした(表1)。調査方法は、事前の参加同意書と研修後に実施した振り返りアンケートの分析とした。まず、研修に参加する学生に事前に参加同意書を配布し、そこに記載された参加動機を収集した。参加動機は、学生が本研修に対して抱く期待や目標を把握するための基礎データとして活用した。次に、研修終了後に振り返りアンケートを実施し、5点満点のリッカート尺度での評価による定量的なデータおよび研修が学生に与えた影響や感

表2 日程

日本大学スポーツ科学部オーストラリア海外実施研修予定(9/10～17)

9月	曜日	朝食		午前	昼食		午後	夕食	
		時間	場所		時間	場所		時間	場所
10-Jan	火曜日						東京(羽田)第3ターミナル 19:30 集合 3階 団体カウンター Y 近畿日本ツーリスト チケット:eチケット 22:00発 カンタス航空 QF60便		
11	水曜日			8:55 シドニー到着予定 ニューカッスル行きのバス		貸切バス	14:00 キャンパスオリエン テーション 15:00 ニューカッ スレイストエンドオリエン テーションウォーク キャンパスからフォアショア ・ノビーズ・ニューカッスルビー チ・キャンパス	19:00	(1)日本キャンパス
12	木曜日	6:30	(1)日本大学キャンパス	7:30 出発時間 キャラハンキャン パススポーツプレジेंटツ アー UoNシャトルバス ピラティスジムセッション		キャラハン キャンパス 各自	男女混合タッチラグビーセッ ション OR アルティメットフリ スビーセッション シャトルバスでキャンパスに戻 る	19:00	(2)日本キャンパス
13	金曜日	6:30	(2)日本大学キャンパス	8:00 出発時間 Nobbysビーチ サーフスクールセッション ノビーズビーチまでは徒歩		市内 各自	13:00～15:00 ニューカッス ルナイツNRLトレーニング施設 訪問 施設見学 講義:脳震盪について「コンタク トスポーツにおける頭部衝撃リ スク管理」	19:00	(3)日本キャンパス
14	土曜日	6:00	(3)日本大学キャンパス	7:00 出発時間 8:00 パークランストックトン (5km) フェリーまで徒歩 オールド・ニューカッスル・ス テーション・マーケットまで見 学(徒歩)		市内 各自	ブラックバット保護区 野生生物園訪問 17:00～19:00 NuSpace City Campusでバーベキュー		(4)バーベキュー
15	日曜日	7:00	(4)日本大学キャンパス	9:30～10:00 出発時間 12:00 女子ラグビー観戦 NRLW:@ Gosford クイーンズランド州カウボーイ ズVシドルースターズ		スタジアム 各自	シドニーへ移動		各自
16	月曜日		ホテル	自由時間		市内 各自	20:55PM シドニー出発 カンタス航空 QF025		各自
17	火曜日			東京(羽田)第3ターミナル 5:55到着予定					

想，学びの内容について自由記述式により定性的なデータを収集した．なお，アンケートの結果は統計的に処理され，参加者のプライバシーを保護するために匿名化され，個人が特定されることのない形で分析が行われた．

4. 結果と分析

4.1 参加動機

本研修に参加した14名の学生の参加動機を，主に「英語力の向上」，「異文化交流の楽しみ」，「スポーツ知識・技能の習得」，「海外経験」の4つのカテゴリーに分けた（表3）．まず，「英語力の向上」を理由とする学生が最も多く，14名中9名が英語力向上を目的として挙げている．これは，海外での生活を通じて，実践的な英語を習得しようとする意図が強く反映されていると考えられる．特に，異文化交流と組み合わせると言語力を高めたいと考えている学生が多く，国際的なコミュニケーションスキルの向上を目指していることが読み取れる．次に，「異文化交流の楽しみ」が動機として挙げられたケースが多く，14名中7名が異文化交流を目的としている．これらの学生は，オーストラリアでの現地生活を通じて，文化の違いや新しい人々との出会いを楽しむことに重きを置いており，異文化

に対する興味や関心の高さがうかがえる．「スポーツ知識・技能の習得」に関しては，4名の学生がこの理由を挙げており，スポーツに関連した専門的な知識や技術の習得に重点を置いていることがわかる．これには，トレーナーの技術や，アスリートのライフスタイル，スポーツ環境の違いなどが含まれており，学術的および専門的な視点での学びを期待している．最後に，「海外経験」を動機に挙げた学生が1名おり，海外での生活を通じて新しい経験を積むことが主な目的であることが示されている．この学生にとって，英語力の向上も重要な要素ではあるが，初の海外渡航のため，未知の文化や環境に身を置くこと自体が大きな学びであると思われる．

以上の通り，最も多い動機は「英語力の向上」であり，参加者の過半数がこの点に重点を置いていた．また，「異文化交流の楽しみ」も多くの学生にとって重要な要素であり，文化的理解の深化が期待される研修であることが伺える．「スポーツ知識・技能の習得」に関しては，特定の学生が強い関心を示しており，スポーツに関連する専門知識を深めたいと考えていることが確認された．「海外経験」は少数ではあるものの，国際的な経験を積むことが参加の重要な動機となっていることがわかる．

表3 参加動機

No.	学年	性別	英語力向上	異文化交流	スポーツ知識・ 技能の習得	海外経験
1	3	男	○	○		
2	3	男	○	○		
3	3	男	○	○		
4	2	男	○	○		
5	2	男	○	○		
6	2	女	○			
7	2	女	○			
8	2	女	○			
9	2	女	○			
10	2	女		○		
11	1	男	○			○
12	1	男		○	○	
13	1	女			○	
14	1	女			○	
合計			9	7	4	1
割合			64%	50%	29%	7%

4.2 学年・性別別の参加動機の傾向

次に、参加者14名を対象に、参加動機を「学年」、「性別」、「参加動機」に基づいてクロス集計を行った。まず、「英語力向上」、「異文化交流」、「スポーツ知識・技能の習得」、「海外経験」の4つの動機カテゴリーについて、参加者の学年および性別による分布を分析した。学年別の傾向では、3年生は「英語力向上」と「異文化交流」の両方を動機に挙げる割合が高かった。特に3年生は3名中2名が両方の動機を持っており、全体の66%がこれらを参加の理由にしている。一方、2年生は「英語力向上」が顕著で、5名中5名がこの動機を持っていた(100%)。また、1年生では「異文化交流」が中心で、4名中3名が異文化交流を主な目的としていた(75%)。性別による違いとしては、男性は7名中4名(約57%)が「英語力向上」と「異文化交流」の両方に強い関心を示す傾向がみられた。これに対し、女性は7名中4名(57%)が「英語力向上」に強い興味を示した。

4.3 動機のカテゴリー別の傾向

「英語力向上」は全体で64%の学生が挙げており、特に2年生の男性に多く見られた(5名全員)。性別別では、女性(7名中4名)に比べて、男性にこの動機が多かった(7名中5名)。「異文化交流」は全体で50%の学生が挙げており、特に3年生に強く見られた。性別では、男性の約43%(7名中3名)、女性の57%(7名中4名)が挙げており、女性の方が異文化

交流に対する関心が高いことがわかる。「スポーツ知識・技能の習得」は、2年生を中心に見られ、特に2年生の男性が多く挙げている。全体では29%の学生がこの動機を持っており、特にスポーツ関連の学びに興味を示す学生が一定数存在していることが示された。「海外経験」は唯一、1年生の1名のみ(7%)がこれを挙げており、全体としては参加動機としては希少であった。クロス集計を通じて、学年別では、3年生が「英語力向上」や「異文化交流」に強い関心を示し、2年生では「スポーツ知識・技能の習得」が顕著に見られた。1年生は主に「異文化交流」に関心が高い傾向が見られた。また、性別による違いとして、男性・女性共に「英語力向上」に重点を置き、男性は「異文化交流」への関心も高いことが明らかとなった。これらの結果を踏まえると、研修では英語力向上に寄与するようなプログラムを中心に、「異文化交流」を掛け合わせた形で設計することが必須条件だと思われる。さらに、異なる学年や性別のニーズに応じた多様なプログラム内容を提供することで、全体の満足度と学びの効果を高めることが可能となるだろう。

5. 振り返りアンケート

次に本研修の参加者に対して研修後に実施した振り返りのアンケート結果を分析し、以下のような結果が得られた(図1)。なお、振り返りアンケートは5点満点のリッカート尺度と自由記述方式を用いた。

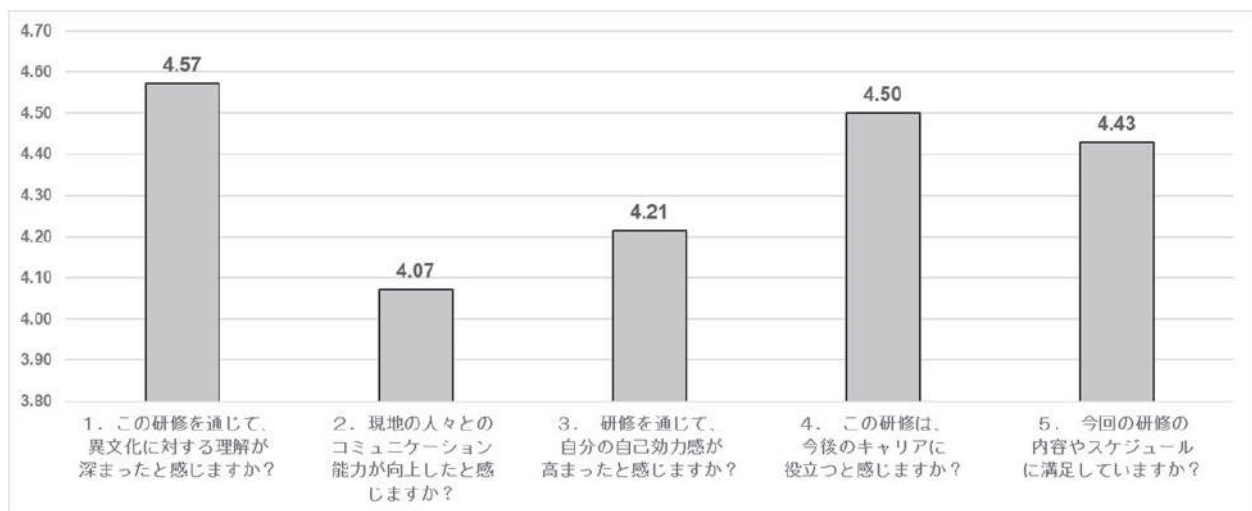


図1 振り返りアンケート

5.1 異文化理解の深化

研修を通じて、異文化に対する理解が深まったかを尋ねた質問では、全体の平均値は4.57点となった。この結果から、ほとんどの参加者の異文化理解が進んだと強く認識していることが示された。特に「非常にそう思う」と回答した割合が多く、研修が参加者にとって異文化を直接体験し、理解を深める有効な機会であったことがうかがえる。この点に関し、ある参加者は、「スポーツに限らないかもしれないが、『個』を大切にしていると感じた。ピラティスやタッチフットを通じて、『周りが〜』ではなく、『自分が』何をしたいのかを大切にしているように感じた。ただ、それは自己中ではなく、周りのことを考えた結果自分がどうしたいのかというのを考えてプレーしていると感じた」と記しており、また他の参加者は、「自分たちをとてフrendリーに受け入れてくれる姿勢や人目を気にすることなく自分のスタイルでベストを尽くす姿勢など、日本人には欠けているなと感じるものを兼ね備えていた」と回答している。こうした記述から、オーストラリアの人々との交流を通して、スポーツに対する姿勢が日本と異なる点に感銘を受けた参加者も多く、自己の意思を尊重しながら周囲に配慮する姿勢が学びとなったことが推察される。

また、「指導者の方が一緒になって体を動かしたり、私たちに沢山声をかけてくれたりと指導者と教えられる側がとても距離が近かった。また一緒に受けていた方たちは、できないからやらないんじゃないで自分のできる範囲で、全力でやっていたのが印象的だった」という回答や、「勝つこともよりも楽しむことを優先しているような気がした。それもあって準備体操も始めのミーティングも軽くやっていたのではないか。しかしプレーはとてもメリハリのあるものだった」という記述から、日本とオーストラリアのスポーツ文化における顕著な違いとして、オーストラリアでは「楽しむこと」が重視される点が多く参加者に強い印象を与えていると思われる。回答には練習や試合中でも楽しみながら学ぶ姿勢や、選手主体で進められる練習方法、フrendリーでオープンな雰囲気は、日本との大きな違いとして言及されている。さらに、パークランやサーフィンといった活動を通じて、年齢やスキルに関係なく、誰もがスポーツを楽しめる環境

が整っていることに感銘を受けたという意見も多く見られた。

加えて、ある参加者からは「日本は、まず初めに説明から入り理屈から教える印象が強かったですが、オーストラリアは、まずやってみようという実践型という点が相違点だと感じました」や、「オーストラリアは、初心者と壁を作らず、巻き込んで一緒に楽しくやろうとしてくれる。とにかくまずやってみよう精神」など、ピラティス、タッチラグビー、サーフィンなど、実際の体験を通じた学びのスタイルが強調され、受講者は「まずやってみる」ことの重要性を学んでいると思われる。特に、完璧でなくても積極的に取り組むことの大切さを実感したという声が多く見られた。

5.2 コミュニケーション能力の向上

現地の人々とのコミュニケーション能力の向上についての平均値は4.21点であった。これは異文化理解に比べやや低いものの、多くの参加者が、自身のコミュニケーション能力が向上したと感じていることを示している。例えば、参加者の一人は、「この研修を通して、研修前の自分よりもコミュニケーション能力が成長したと感じた」と記している。また「人と話すコミュニケーションの幅が増えたと感じました」という回答など、言語の壁を超えて積極的に交流したことが、自信や実践的なスキルの向上に寄与していると考えられる。さらに「初めはなかなか自分から声をかけることができなかったのですが、終わりに近づくにつれ、なんのためにオーストラリアまで来たのかを見つめ返すことができ、自分から声をかける努力をしました。そのため、自分から積極的にという面で成長出来たと感じております。」といった回答から、時間が経つにつれ、コミュニケーションに対する積極性が増し、自ら行動することで成長を実感した様子が伺える。このような経験は、異文化環境における言語の壁を乗り越え、主体的にコミュニケーションを図る能力を育む一助となっている。加えて、「自分の意思をしっかりと伝える力がつきました」との意見もあり、ただ単に会話をするだけでなく、自分の意見や考えを相手に理解させる能力も同時に向上していることが示唆される。これらの結果から、参加者は現地の人々との交流を通して、コミュニケーション能力の向上だけ

でなく、自己表現力や積極性といった自己成長にもつながったことが推察される。

5.3 自己効力感の向上

自己効力感（何事にも挑戦できるという感覚）の向上に関しては、平均値が4.1点となり、ほとんどの参加者が研修を通じて自己効力感が高まったと感じていることがわかる。ある学生は、「恥ずかしがらず話しかければどうにかなるという思い切る力が身についた。」と記している、また、「チャレンジ精神。やっぱり最初は不安だったり、間違えたらどうしようという恥ずかしさだったりがあったが、後悔したくないし、せっかく来たのだから悔いのないようにしようと思ひ、間違えても良いから少しでも疑問に思ったことは聞いて、悔いのない研修にしたいと思えたこと」と回答した学生もあり、「どちらとも言えない」と答えた参加者も14名中3名（21.4%）と少数存在するものの、挑戦する意欲を醸成する機会として研修が機能していたと思われる。

5.4 キャリアへの有用性

今後のキャリアに対する研修の有用性についての平均値は4.43点であった。例えば、ある学生は、「オーストラリアの方と関わって、人を思いやることの大切さやリスペクトすることの大切さを学んだ。（中略）、これから社会に出た時に絶対に忘れては行けないと思う（後略）」と回答している。さらに「人との接し方は本当に勉強になった。初対面でも、フレンドリーになんでも答えてくださり、さらに日本のことについて知っていることを伝えてくれたり質問してくれたり、自分が日本にいて逆立場だったらそうできるかわからない。常に笑顔で接して下さって気分もとても良かった。これはぜひ見習って、人と接するときに相手が楽しめるようなコミュニケーションを意識していきたい」と回答した学生もいた。加えて、ある学生は「英語での会話を実際してみても、完璧な文で話すよりテンポよく会話することが大事だとわかったので、英語の瞬発力をもっと高めたいと思った」と言っている。この結果から、参加者の多くが本研修を将来のキャリア形成において重要な経験と捉えていることが示唆される。特に、国際的な経験や異文化理解、英語

でのコミュニケーション能力の向上がキャリアに有利に働くと考えられている。

5.5 研修内容およびスケジュールに対する満足度

研修全体の内容やスケジュールに対する満足度については、平均値が4.43点であり、参加者の多くが研修に高い満足感を示していることが明らかとなった。一部ではスケジュールのタイトさや体力的な負担について言及されたが、全体的には「満足」または「非常に満足」という評価が多かった。

本研修は参加者に対し、異文化理解の深化、コミュニケーション能力の向上、自己効力感の強化、キャリアへの有用性という点で、非常に高い効果をもたらしたと評価できる。特に異文化との接触を通じて、参加者は自らの成長を実感し、それが将来的なキャリア形成に資するものと認識している。加えて、研修内容やスケジュールに対する高い満足度も得られており、今後のプログラム運営においても、この形式が有効であることが示唆される。

しかし、英語でのコミュニケーションは主な目標に掲げた参加者が多かったが、その達成度にはばらつきが見られた。半数近くの参加者は目標達成を実感しており、言語の壁を乗り越えるための工夫や努力が報告されている一方で、一部の参加者はまだ課題が残っていると感じている。例えば、「コミュニケーションを自分から取るといった個人目標を立てていた。自分で話しかけられるタイミングがあるときは話そうとしていたが、聞き返されたり伝わらないことが怖かったため、あまり自分から話しかけられることは少なかった」や、「この研修に行く前に、オーストラリアの方々と沢山話すことが目標だったけど、思ったより自分から話しかけに行けず、壁を作ってしまうことがあった。それはまだ自分の英語に自信がなかったり、話しかけ方が分からなくて戸惑っていた部分があったと思う」との回答もあった。また、細かいところまで知りたかったが、自身の語学能力の関係で質問が不十分だったとする反省の声もあった。このことから、事前学習の強化が求められる一方で、積極的な行動を通じて学びを深める姿勢が重要であり、自発的な学びの促進が必要である。

6. まとめ

海外留学の成功において重要なのは、研修期間の長さではなく、学生の学習成果に結びつくような参加目的の設定や、事前・事後のオリエンテーションの工夫であると指摘されている⁹⁾。本研修でも事前学習を実地し、参加目的を個人およびグループで設定する時間を設けた。さらに現地の研修では、その日の振り返りを毎日実地した。振り返りは認知科学や学習科学に基づく学習研究の進展により、その重要性が明確になってきている⁹⁾¹⁰⁾。学生たちには、その日の出来事に関してテーマごとの気づき、および英会話に関する自己評価を発表させた。評価の観点は、振り返りのフレームワークの1つであるGBN法を利用した¹¹⁾。

結果として、本研修の参加者からは研修内容に対して全体的に非常に高い評価を得ており、自己の成長を実感している者が多数である。日本とオーストラリアは同じ島国でもスポーツに対するとらえ方に大きな違いがある。日本のスポーツは自治や自由の精神よりも犠牲や忍耐などの徳目が優位であり、さらに単純、非合理などの練習態度を美德とする傾向や、武士道精神の強調といった「日本的な精神風土と結びついて、独特の性質を生み出し」¹²⁾ている。それに対してイギリスの植民地であったオーストラリアは、スポーツは「娯楽」であり「楽しむ」ものとしてとらえていていると思われる。このようにスポーツに対する考えや違い、また国民性の違いがあることを学べたことは、オーストラリアで実地研修を行う意義の1つであると思われる。その一方で課題としてスケジュールや交流時間の配分、事前学習のさらなる強化が今後の改善点として挙げられており、これらの点を改善することで、より効果的な研修運営が可能となると考えられる。また本研究の限界として、まず対象者の数が14名と少数である点が挙げられる。サンプルサイズが小さいため、得られた結果を一般化するには限界がある。また、本調査は特定の学年と性別に偏った構成であるため、他の年次や性別に属する学生に対して同様の結果が得られるかについては不明である。さらに、調査におけるデータ収集は主に自己報告形式のアンケートに依存しているため、回答者の主観が結果に影響を与える可能性がある。したがって、結果の客観性や信頼性に一定

の制約がある点も本研究の限界であろう。今後の研究においては、対象者を拡大し、より多様なデータ収集方法を組み合わせることが望ましい。

参考文献

- 1) 横田雅弘・太田 浩・新見有紀子・花田真吾・渡部由紀・秋庭裕子：海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト：大規模調査による留学の効果測定，学文社，2018
- 2) 嶋内佐絵：グローバル人材育成と大学の国際化に関する一考察，横浜市立大学論叢人文科学系列，66 (1)，109-126，2014
- 3) 北出慶子：留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案：異文化間コミュニケーション能力理論と実践から，言語文化教育研究，9，65-90，2010
- 4) 鈴木理恵・林 千賀：海外語学短期留学の効果：学生の言語的・情意的側面に見られる変化，関東甲信越英語教育学会誌，28，83-96，2014
- 5) 小林文生：短期海外研修による教育的効果の再検討：学生の報告書の多面的な分析を通して，人文・自然研究，7，162-185，2013
- 6) 中西尚志：飛び込んだ先に広がる世界，Colloid & Interface Communications，48，2，44-46，2023
- 7) 黒宮亜希子，橋本由紀子，金沢真弓：海外留学に臨む大学生の実態と課題について—学生を対象とした調査を基に一，吉備国際大学研究紀要，26，121-133，2016
- 8) 秋庭裕子：「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の学習成果：オーストラリア研修の事例より，人文・自然研究，3，15-28，2012
- 9) 和栗百恵：「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—，国立教育政策研究所紀要，139，85-100，2010
- 10) 瀧本真己，木内敦詞，石道峰典，中村友浩，西脇雅人：大学体育実技授業の振り返り文章数を多く記述するほどライフスキルの獲得が促進される：大学体育授業を対象とした縦断研究，大学体育学，15，3-11，2018

- 11) 島沢優子：世界を獲るノート アスリートのイン
テリジェンス，カンゼン，2019
- 12) 高橋健夫：日本のスポーツ教育：スポーツ大事
典，大修館書店，東京，544，2，64-65，1987